The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	詩人ムハンマド・イクバールのラーホールでの学生時代
Author(s)	イクバール, ジャーヴェード; 山根, 聡
Citation	印度民俗研究　別巻. 2020, 6, p. 8-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78711
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

詩人ムハンマド・イクバールの
ラーホールでの学生時代

ジャーヴェード・イクバール

山根 聡 訳・注

これは、二〇世紀初めに活躍したウルドゥー語とペルシア語の詩人ムハンマド・イクバールの学生時代に関する伝記『生き生きした流れ *Zinda Rūd*』の部分訳（一〇〇―一〇四頁）である。

イクバールは、南アジアのムスリムの自立を訴える数多くの詩を残し、パキスタン独立の理念を支えた詩人、大学者(ʿallāma)として尊敬を集めている。

イクバールはインドとパキスタンが独立した一九四七年より前の一九三八年に没しており、彼自身が現在の分離独立国家「パキスタン」を構想したわけではなかった。イクバールが一九三〇年のアラーハーバードで開催された全インド・ムスリム連盟年次大会における議長演説の中で語った「ムスリム国家構想」とは、「わたし（イクバール）は、パンジャーブ、北西辺境州、スィンド、バローチスターンが合併して、単一の国家になるように望んでいる。イギリス帝国内の自治であれ、帝国からの離脱であれ、北西インド＝ムスリム統合国家を形成することが、少なくとも北西インドのムスリムの最終的に行き着く運命である」[加賀谷・浜口一九七七年、百十一頁]というものであった。これはイギリス帝国内での連邦制のような形での国家構想という意味合いも残しており、パキスタンのようなムスリム分離国家構想としては極めて不明確[加賀谷・浜口一九七七年、百十二頁]であった。したがって、彼のこの構想は、彼の死後一九四〇年三月二三日のラーホールにおける全インド・ムスリム連盟会議で採択された「パキスタン決議」以降の、パキスタン独立に向けた「パキスタン運動」とは直接的に継承されていなかった。ただ、イクバールは晩年の一九三七年六月二二日付のムスリム連盟議長ムハンマド・アリー・ジンナー宛の私信において、「北西インドとベンガルのムスリムはそれぞれインド内外の民族と同様に自決権を持つ民族であり、これらで構成される一つの分離連邦国家を作るべきではないか」[加賀谷・浜口 一九七七年、百十二―十三頁]と訴えていた。しかしいずれの構想についても当時はほとんど関心が持たれることはなかった。パキスタン運動が本格化するようになって、彼の構想がパキスタン構想の原点と捉えられるようになったのである。それは、彼自身の詩作がムスリムの自立を訴えるものであったがゆえに、独立国家パキスタンの理念との親和性を持っていたためであった。

南アジアのムスリムの自立を謳ったパキスタンの建国詩人と評価されるものの、一九〇五年から一九〇八年までイギリスとドイツに留学したイクバールは、留学期間の途中まで、宗教の差を超えてインドへの祖国愛を描いた詩作を発表していた。現在インドで郵便切手になっている「すべての世界でインドが一番」という詩句は、まさにイクバールの初期の、領土的ナショナリズムを描いた作品である。祖国愛を訴えていたイクバールは渡航後にムスリム・ナショナリズムへと傾倒し、ムスリムの自立と団結を志向する数多くの詩作を残すようになるのである[山根 二〇一九年]。このため、パキスタンでイクバール研究とは、ムスリム・ナショナリズムに傾倒して以降の作品に関するものがほとんどで、あまり関心が寄せられていない。初期イクバールの領土的ナショナリズムからムスリム・ナショナリズムへの変化についての先駆的かつ本格的な研究には、[松村 一九八二年、一九八三頁]が挙げられる[1]。今回訳出した文章は、イクバールのラーホールでの学生時代に関する伝記で、イクバールが過ご

した学生時代の大学ののびやかな雰囲気や、パンジャーブでウルドゥーの文人が育ちつつある様子を見事に描き出している。またイクバールが当初ありきたりな詩人と評価され、彼自身もミルトンの詩の雰囲気で残したいとか、思想を西洋の詩の雰囲気を生み出したいと何度も述べていたというくだりは、彼の詩作が伝統的なウルドゥー詩の世界から、同時代的な内容を織り込んだ新たな局面に移行する時期にあったことを示唆しており、イクバール個人の研究のみならず、二〇世紀初めの南アジアのムスリムの動態［山根 二〇〇三年］、現代ウルドゥー詩の形成を検討するうえで重要である。

伝記の作者ジャーヴェード・イクバール（Jāved Iqbāl,1924-2015）はイクバールの息子でパキスタンのラーホール高等裁判所主席判事や最高裁判所判事を務め、上院議員としては国会議長を歴任した人物で、法や近代イスラーム思想に関する著作を数多く残した[2]。自著においては、父イクバールがイスラーム復興の文脈で語られることに批判的であった。

本書は父イクバールの生涯について、これまでのイクバールと交流のあった回想録、伝記や研究書などを駆使してまとめたもので、当初三巻本として刊行され、現在は一巻にまとめられて刊行されている。

第五章　ガヴァメント・カレッジ・ラーホール

ジャーヴェード・イクバール

一八九五年九月のとある午後、ひとりの色の白く背丈のある、均整の取れた体躯の若者が、白のシャルワール・カミーズに小さめのコートを羽織り、小アジア風の帽子を被ってラーホール鉄道駅に列車から降り立った。この美青年がイクバールであった。彼の友人シャイフ・グラーブ・ディーンはイクバールを出迎えに駅に来ていた。二人は肩を抱き合い、グラーブ・ディーンはイクバールを、彼の荷物とともに馬車でバーティー門内にある自宅に連れ帰った。イクバールはガヴァメント・カレッジの学士の学生として入学し、数日はグラーブ・ディーンの自宅に滞在した後、「中庭（クアドランガル）を囲むホステル」の部屋番号一で暮らすことになった。イクバールはラーホールの四年の学生時代をこの部屋で過ごしたのであった。

ギャレット[3]によれば、当時ガヴァメント・カレッジの学生数は二〇〇人か二五〇人より多くはなかった。したがって。互いが知り合ったり、教師との距離を縮めることは容易だった。ガヴァメント・カレッジ・ラーホールの学舎の前の下に広がる一画の土地は、現在「楕円」と呼ばれているが、そこにはオレンジや檸檬の数えきれない枝を持った大木が立ち並んでいて、蜜蜂が巣をこしらえていた。夏の長い午後、この場所と青年たちと蜜蜂が群れを成す場所となっていて、青年たちは木々の密集した陰にそれぞれの敷布を敷いて何時間も横たわりながら読書に耽っていた。彼らの頭上では蜜蜂が羽音を震わせていた。カレッジの小さな塔の正面のやや北側には、古いバニヤン樹があり、その幹の

周囲には木箱に座った青年たちが本を読んだり、楽しそうに話していた。カレッジでの生活はきわめて簡素なものであった。さまざまな種類の結社や協会、会合や集会の伝統はまだなかった。教師と学生は互いを知り合う機会がよくあった。こうして前途有望な学生たちは教師たちの目の届く範囲にいて、教師たちからあらゆることを学び、その影響を受けていた。

イクバールにとってカレッジで友人を作るのは難しいことではなかった。数名の学生のことは最初から知っていた。たとえばチョウドリー・ジャラールッディーン・ダスカはスィヤールコートの出身で、スィヤールコートで入学資格を得てラーホールに出てきてガヴァメント・カレッジに入学したのであった。彼は学生寮に住んでいて、詩作に高い関心を寄せていた。その趣味は（スィヤールコート時代のイクバールの恩師）サイイド・ミール・ハサンとの交流で育まれたものであった。イクバールとグラーム・ビーク・ナイラング[4]との出会いはジャラールッディーンを通したもので、まだイクバールがグラーブ・ディーンの元に滞在していた時で、学寮にはまだ入っていなかった。ナイラングとジャラールッディーンは入寮していた。とある夕方のこと、ナイラングはジャラールッディーンを伴って街に出かけた。バーティー門のそばに着いたところ、イクバールが近づいているのが見えた。ジャラールッディーンはナイラングに彼を紹介しながらこう言った、「僕が話していた、この人が詩人のシャイフ・ムハンマド・イクバールだよ」

寮のイクバールの部屋は徐々に友人たちの人だかりができるようになり、詩を読む人々の拠点となっていった。料での交流についてナイラングは以下のように述べている。

「イクバールとの交流は彼も学寮に入ってきたときから活発になった……イクバールは学士の授業の上級生クラスにいて、（寮も）個室に住んでいた……食事の支度は、上級生、下級生は同じ厨房で行われていた。ただ、ムスリムの厨房は別、ヒンドゥーとスィクの厨房は別という違いがあった……イクバールは一階の西列の最も南側の個室を得たのであった。私は東列の寄宿舎に住んでいた。居住場所に関して言えば、二人には大きな隔たりがあったかに思われたが、カレッジでの授業以外の時間のほとんどは、一緒に過ごしていた。学習時間を終えた夏の夜になると、イクバールの寝台は私たちの寄宿舎の手前[庭]の中の頂点となる要素があって、物事に動じない人物そのものだった。私と、カレッジの学寮に住んでいる彼の友人は皆、彼の部屋に集まって、彼はそこに場の主となって座していた。水煙管も当時から彼の傍らにあった。帽子を被らず、下着のシャツに踝までの腰布を巻いていた。冬にはそれに毛布を覆って座りながら水煙管を飲んでいたもので、あらゆる話題で明け暮れていた。性格は機智に富んでいて、強烈な冗談を言っていた。文学の議論もなされ、詩作や詩の披露も行われていた……この初期の段階では誰もイクバールのことを、いい詩人ではあってもありふれた詩人であるという以外には思えなかった。あるいは、あえて言うならば、[当時イクバールを]見る人たちに、見る目がなかったか、あるいは、のちに形成された資質が当時はなかった、ということが言えるだろう……ただ、我々のこの三年の付き合いの中で、イクバールが何度もとある計

画を述べていたことは書き留めるに値するだろう。それは、ミルトンの有名な詩『失楽園』や『復楽園』の話をしながら、カルバラーの悲劇をあのような雰囲気で詩にして、ミルトンの詩に対する回答にしたいというものだった。だがこの計画が完遂されることはなかった。もう少し言わせてもらえれば、ウルドゥー詩の改革と発展、そしてウルドゥー詩に西洋の詩の雰囲気を生み出すという話を何度もしていたのだった」

寮生の時代、イクバールは時折友人宅に行って滞在することもあった。たとえばグムティー・バーザールの少し先のサイイド・ムッターのハヌマーン通りにはマウラーナー・サラーフッディーン・アフマドやその兄マウラヴィー・ズィヤーウッディーン・アフマドの父親の家があった。ズィヤーウッディーン・アフマドはイクバールの同級生であった。それでイクバールは時々彼の元に出かけて滞在したのであった。ズィヤーウッディーンとナイラングは体操が大好きであった。家屋の片隅に作られた土俵でレスリングをして、この趣味を満たしていたのだった。イクバールも時には興に乗じて褌を締めて土俵に降り立ち、ナイラングとレスリングをしていた。

学士の授業でイクバールは英語と哲学、アラビア語の教科を学んだ。イクバールはガヴァメント・カレッジの学生であったが、当時オリエンタル・カレッジの学士の授業でも学んでいた。グラーム・フサイン・ズルフィカール博士の話では、オリエンタル・カレッジがガヴァメント・カレッジの建物の中にあったことから、両カレッジの間では相互協力の指針のもと、いくつかの授業科目の教授について共同で行われていた。イクバールは学士課程の学生で英語（文学）と哲学の科目はガヴァメント・カレッジのクラスで学んでいたが、アラビア語とアラブ文学の研究はオリエンタル・カレッジで行っていた。当時のガヴァメント・カレッジとオリエンタル・カレッジの教官には、マウラーナー・フアイズル・ハサン・サハラーンプリー、マウラーナー・ムハンマド・フサイン・アーザード[5]、そしてマウラヴィー・ムハンマド・ディーンが含まれていた。

イクバールは一八九七年にアラビア語と英文学を優秀な成績で合格し、メダルも授与された。パンジャーブ大学の一九〇六年度の学年歴によれば、イクバールは学生の試験を二等級で合格した。アズィーム・フサインは自身の父親に関する『ファズル・フサイン』という書名の英語の伝記の中で、一八九七年の学士の試験総数一〇五名の学生が合格し、その中で四名が一等級を獲得した。イクバールとその同級生のミヤーン・ファズル・フサインは二等級であった。イクバールはムスリム学生の中で一等、ファズル・フサインが二等であった。

イクバールの関心は哲学に向けられていたので、彼は趣旨課程では哲学研究科に入学した。当時学士課程の哲学の教授にはW・ベルがいて、彼は一八九六年に学校監査役となってガヴァメント・カレッジを去っていた。彼の後任としてしばらくの間は歴史学の教授デリンジャーが歴史学を教えていた。その後オッシャー教授がガヴァメント・カレッジに着任した。彼は一八九八年に辞職し、その代わりにT・W・アーノルド教授[6]が着任した。

ギャレットが語るところによると、アーノルドは一八九八年二月一一日に教授の職に就いた。アーノルドはアリーガル大学から離れてガヴァメント・カレ

ッジ・ラーホールで哲学の教授に就任した。サル・サイイド[7]はアーノルドのことを高く評価していて、マウラーナー・シブリー・ヌウマーニーもまた彼の親友であった。アーノルドの親切な指導はイクバールの哲学研究の気持ちを輝かせた。おっしてアーノルド自身も、イクバールの才能に感銘を受け、イクバールと友人のような態度をとるようになっていった。サー・アブドゥル・カーディル(Abd al-Qadir)[8]によると、アーノルドは学術的な探求の近代的な手法に通暁していた。彼は自分の教え子たちを自身の学問の目指すところに取り込み、教師と学生の間で初日から生まれた友情は、結果的に自身の教え子が教師の後を追ってイギリスに行くほどであった[9]。アーノルドはイクバールについて、自分の友人たちに、このような教え子は教師を研究者に育て、研究者をより優れた研究者に育てるのだ、とよく語っていた。イクバールは一八九九年三月に哲学の修士号の試験を受けた。パンジャーブ大学の一九〇六年の学年歴によれば、彼は修士課程で三等級の結果であった。だが、大学全体において、この教科で唯一の合格者であった。彼はパンジャーブで最良の成績を出して銀メダルを受けたのであった。

哲学の修士課程の授業とともにイクバールは一八九八年にラーホールの法学校のクラスの法学の学生としても学んでいた。だが彼は一八九八年一二月に法学の初級の試験で落第した。彼は後に一九〇〇年の法学の初級の試験に、授業に参加しなくても受験できるように申請したが、その申請は受理されなかった。その後イクバールはここでの法学の試験を受けることを断念し、その希望は結局、ロンドンで成就することとなったのであった。

アーノルドは一九〇四年に職を辞してイギリスに帰国した。その時イクバールは「惜別の嘆き」と題する送別の詩を一つしたためた。そこには、アーノルドとの交流によってイクバールの中に生まれた学問への関心のことが特に描かれている。

そなたよいずこ、知識のシナイの山頂にいた話し手よ
そなたの息の波は　知識を撒く風であった
いまいずこ　知識の砂漠を進む熱意は
そなたの息で　わが頭にも知識の意欲があった

だがイクバールはアーノルドがイクバールの中に生んだ研究に対する探求心や渇望や、イクバールとアーノルドの個人的なつながりが、イクバールをイギリスに渡航させることを余儀なくしたのであった。それで渡英の決意表明も、以下のような詩に表れている。

狂おしく　手が運命の結び目を解くであろう
パンジャーブの鎖を断ち切り、わたしはそなたのもとに行こう

ともかく、教師との親密な関係にもかかわらず、イクバールがアーノルドの性格について熟知していたということを、ここで無視してはならない。サイイド・ナズィール・ニヤーズィーが語るところでは、一九三〇年にアーノルドの

訃報がイクバールに届くと、涙目で「イクバールは恩師であり友である人を失った」と述べた。これに対しニヤーズィーが東洋学とイスラーム研究の権威としてのアーノルドに対する尊敬を漏らすと、イクバールは驚いたようにこう話しだしたという、「アーノルドがイスラームとどういう関係があるんだ？『イスラームの布教』やこの種の著作に目を向けてはだめだ。アーノルドの忠誠心はただ祖国イギリスにあったのだ。彼がなしたことは、全てイギリスの利益のためだったのだ。私がイギリスにいたとき、彼はブラウンのイラン文学史について何か書くように言ったが、私は断った。なぜなら、私はこの種の著作がイギリスの利益につながっているように思えていたからだ。実はイラン人の民族主義を煽り、イスラーム国家の統一を分解させる目的のもとでの努力の一環だったのだ。要は、西洋の生活というのは、ただ国家のためだけにあるのだ。そして領土的ナショナリズムが求めていることも、国家と国民の両者が同一のものの二つの名前であり、ナショナリズムを何よりも優先させるべきということなのだ。だからアーノルドの目的はキリスト教であってイスラームではなかった。それどころか、政治的に見れば、アーノルドはおろか、あらゆる東洋学者たちは西洋の植民地支配の野望と王政に準じる道を選んできたのだ。彼らのことも、王政支持者や政治家たちの手先だと考えておいた方がいい。」

弁護士のマウラヴィー・アフマド・ディーンが言うのは、イクバールがラーホールに入る前に、バーティー門内の「医師（バーザーレ・ハキーマーン）横丁」[10]で詩会の団体が結成されていた。その会合はハキーム・アミーヌッディーンの邸宅で開かれていた。アミーヌッディーンは医師の家系の出で、その名でバーザールが知られていた。この詩会の基礎はハキーム・シュジャーウッディーンが一八九〇年に築いたもので、当初この詩会はハキーム・アミーヌッディーンの邸宅で開催されていたが、一八九六年にハキーム・シュジャーウッディーンが没すると、詩会はカシュミールの支配者シャイフ・イマームッディーン[11]の末裔ナワーブ・グラーム・マフブーブ・スブハーニーの庇護のもと彼の邸宅で開催されるようになった。ハキーム・シュジャーウッディーンは生前この会の長を務めていた。ミールザー・アルシャド・ゴールガーニー・ディヒラヴィーやミール・ナーズィル・フサイン・ナーズィム・ラクナヴィーは詩会の中心人物であった。この二人も詩をものし、彼らの弟子やその讃美者たちが互いに競い合うように創作詩を読むことで、詩会はさらに賑わった。見物人たちもかなりの数に上り、カレッジの学生たちも詩を読み、詩を理解しようとやって来て、詩作の賛辞を受けたり捧げたりするさまは、引けを取っていなかった。

イクバールはラーホールのどんな詩会にも参加していなかった。だが一八九五年十一月のある夕方、彼の同級生らがイクバールを引っ張ってハキーム・アミーヌッディーンの邸宅でのその詩会に連れて行った。詩会ではアルシャド・ゴールガーニーがいつものようにいたが、彼は参加するためにフィーローズプールから来ていたのだった。ミール・ナーズィル・フサイン・ナーズィムもその場にいた。この二人の（詩作の）弟子たちも多く集まっていて、見物人たちの群衆もあった。おそらくここで、初めてイクバールは詩会で自分のガザルを披露した。彼は以下の詩句を読んだ。

真珠と思って慈悲深き神は摘み取った
その滴は私のかいた冷や汗だった

するとアルシャドは思わず称賛しはじめ、イクバールのことを愛情と尊敬の眼差しで見つめた。イクバールが披露したこのガザルの最終句はデリーとラクナウーとの言葉（ウルドゥー語）に関する争い[12]についてのイクバールの考えを反映したものであった。

イクバールよ、ラクナウーやデリーが目的にあらず
我らは恋人の巻き毛の振れの虜なのだ

実はラーホールでは（デリーからやって来て詩会を始めた）ハーリーやアーザードが詩作の趣味を生んだのであった。アルシャドは優れた詩人であるとともに詩の批評家でもあり、ラーホールを往来していた。というよりも、ある時期彼はラーホールに住んでいたのであった。先に示したイクバールのガザルで、アルシャドは、イクバールが初期の段階でデリーやラウナウーの詩の限界や縛りから解き放たれて、自分自身のために新しい道を生むことができると感じるようになった。ともかく、イクバールはこの詩会に参加するようになり、ラーホールの詩の愛好家たちの関心はイクバールに向けられるようになった。

参考文献

イクバール、ムハンマド、片岡弘次訳注
――二〇一一年『隊商の旅立ちを告げる銅鑼の音』花神社
――二〇一一年『ジブリールの翼』大同生命国際文化基金
――二〇一四年『ムーサーの一撃』大同生命国際文化基金
――二〇一八年『ヒジャーズの贈物』大同生命国際文化基金
加賀谷寛・浜口恒夫 一九七七年『世界現代史 10　南アジア現代史Ⅱ　パキスタン・バングラデシュ』山川出版社
近藤治 二〇〇九年「アーザードのアブル・ファズル伝について」『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』5号
――二〇一〇年「アーザードのアブル・ファズル伝について(承前)」『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』6号
――二〇一一年「アーザードのアブル・ファズル伝について(三)」『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』7号
――二〇一二年「アーザードのアブル・ファズル伝について(四)」『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』8号
露口哲也一九九二年「パキスタンの博物館―ファキール・ハーナ博物館」『象徴図像研究』(6)
松村耕光 一九八二年「初期イクバールにおけるインド・ナショナリズム」『外国語・外国文学研究』6号
――一九八三年「初期イクバールにおけるインド・ナショナリズムⅡ」『外国語・外国文学研究』7号
――一九八四年「イクバールの四行詩(1)」『外国語・外国文学研究』8号
――一九八五年「イクバールの四行詩(2)」『外国語・外国文学研究』9号
――一九八九年「パンジャーブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み(1)」『大阪外国語大学論集』第1号
――一九九〇年「パンジャーブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み(Ⅱ)」『大阪外国語大学論集』第3号
――一九九〇年「パンジャーブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み(Ⅲ)」

『大阪外国語大学論集』第4号
――一九九一年「パンジャーブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み (Ⅳ)」『大阪外国語大学論集』第6号
――一九九二年「パンジャーブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み (Ⅴ)」『大阪外国語大学論集』第7号
――二〇〇五年『生命の水』序論に見られるアーザードのウルドゥー語・ウルドゥー詩改革論」『大阪外国語大学論集』第33号
――二〇〇九年『生命の水』におけるウルドゥー古典詩の時期区分について」『大阪大学世界言 語研究センター論集』第1号
――二〇〇九年「旅するヒズル」―イクバールのウルドゥー詩 (1) ―」『イスラーム世界研究』第2巻2号
――二〇〇九年「悪魔の評議会」―イクバールのウルドゥー詩 ⑵ ―」『イスラーム世界研究』3巻、1号、3巻、1号
――二〇一〇年『生命の水』におけるアーザードのソーズ評価について」『大阪大学世界言語研究センター論集』第3号
――二〇一〇年「コルドバのモスク」―イクバールのウルドゥー詩 (3) ―」『イスラーム世界研究』
――二〇一一年「サーキー・ナーマ」―イクバールのウルドゥー詩 (4) ―」『イスラーム世界研究』
――二〇一二年『生命の水』におけるアーザードのナースィフ、アーティシュ比較論」『大阪大学世界言語研究センター論集』第7号
――二〇一二年「不満」―イクバールのウルドゥー詩 (5) ―」『イスラーム世界研究』第5巻 1．2合併号
――二〇一三年「『生命の水』におけるアーザードのダビール・アニース比較論」『言語文化研究』 39 号
――二〇一三年「不満への回答」―イクバールのウルドゥー詩 (6) ―」『イスラーム世界研究』第6号
――二〇一四年「イスラームの夜明け」――イクバールのウルドゥー詩 (7) 」『イスラーム世界研究』第6巻
――二〇一四年「ムハンマド・フサイン・アーザードのペルシア詩論について」『言語文化研究』第40号
――二〇一五年「「蠟燭と詩人」―イクバールのウルドゥー詩 (8) ―」『イスラーム世界研究』第8号
――二〇一六年「「苦しみの姿」―イクバールのウルドゥー詩 (9) ―」『イスラーム世界研究』第9号
――二〇一七年「「亡き母の思い出」―イクバールのウルドゥー詩 (10) ―」『イスラーム世界研究』第 10 号
――二〇一八年「ガザル (1) ―イクバールのウルドゥー詩 (11) ―」『イスラーム世界研究』第 11 号
――二〇一九年「ガザル (2) ―イクバールのウルドゥー詩 (12) ―」『イスラーム世界研究』第 12 号
――二〇二〇年「ガザル (3) ―イクバールのウルドゥー詩 ⒀ ―」『イスラーム世界研究』第 13 巻
山根聡二〇〇三年「南アジア・イスラームの地平―イクバールとマウドゥーディー」小杉泰、小松久男共編『現代イスラーム思想と政治運動』東京大学出版会
――二〇〇四年「国語ウルドゥー語とその文学の評価を巡る地域差」山根聡、黒崎卓、子島進共編『現代パキスタン分析 民族・国民・国家』岩波書店
――二〇一九年「三章 イクバールのロンドン」小松久男編『歴史の転換期 10 1905年 革命のうねりと連帯の夢』山川出版社
Iqbāl. Jāved, 2014, *Zinda Rūd*, Lahore: Sang-e Meel Publications.
Kāshmīrī, Tabassum, 1978, *Āb-e Hayāt*, Lahore: Maktaba-e ʻĀliya.
Matsumura Takamitsu, 2016 , ʻNaẓm-e Āzād ke Maṭbūʻah Nuskẖe: Ikhtilaf-e Matn kā Taḥqīqī Muṭāʻah', *Janūb Maghribī Aishiā kā ʻIlmī Tanāẓr: Tārīkẖ, Tahdẖīb, aur Adab*.Karachi.
Qureshī, Muḥammad ʻAbd Allāh, 1977, *Muʻāṣirīn Iqbāl kī Naẓar meṇ*, Lahore: Majlis-e Taraqqī-ye Adab.

Shujā', Ḥakīm Aḥmad,1989, *Lāhor kā Celsī*, Packages Limited.

---

[1] わが国におけるイクバールの作品の翻訳については、参考資料に示した。

[2] 父イクバールと同じスィヤールコートに生まれ、ラーホールのガヴァメント・カレッジを卒業後にケンブリッジ大学に進学、哲学で博士号を取得するとともに、ロンドンのリンカーンズインで一九五六年に弁護士資格を得た。イクバールの著作には息子の名前を冠したペルシア語詩集『永遠の書 *Jāvīd Nāmah*』（一九三二年）がある。

[3] H.L.O.Garrett,1881-1941 ガヴァメント・カレッジの歴史学教授で同校長やパンジャーブ古文書館初代館長（一九二三-三六）を修めた。共著や編著に *A History of Government College, Lahore, 1864-1914*, *Mughal Rule in India, European Adventures of Northern India*, 1785 to 1849, *The Grand Trunk Road in the Punjab*, *Events at the Court of Ranjit Singh 1810-1817: Translated from the Papers in the Alienation Office, Poona*, *The Trial of Bahadur Shas Zafar* などがある。

[4] Mīr Ġhulām Bhīk Nairang (1875-1952). パンジャーブのアンバーラ生まれ。詩作についてはイクバールと同じく詩人ダーグ(Dāgh Dihlavī 1831-1905)の弟子であった。ガヴァメント・カレッジ・ラーホールと法科大学院に学んだ。ジャラールッディーンとナイラングはガヴァメント・カレッジの同級生であった。ナイラングとイクバールは知り合うと、自作の詩を二十句近く交換して互いの詩想を確認した。ナイラングはこの時の印象について、イクバールのガザルを読んで目が覚めた、と述懐し、それまでのパンジャーブの詩人によるウルドゥー詩には関心を持たなかったが、イクバールの詩を読んで、ウルドゥー詩は詩人が(デリーやラクナウー、ラーホールなど)どの地域に生まれたかで決まるのではなく、詩想によって育まれるのだと気づいたという。これに対してイクバールがナイラングの詩についてどのような感想を抱いたかは不明だが、その後の二人の交流の深さを考えると、互いに尊敬しあっていたことが窺える、と Abd Allāh Qureshī は述べている[Qureshī1977:63-66]。

[5] Muḥammad Ḥusain Āzād, 1830-1910. デリー出身。父 Muḥammad Bāqir はデリー・カレッジに学び、一八三七年に *Dihlī Urdū Akhbār* を創刊した。この新聞はインド大反乱(一八五七年)でインド人を支援したことから、大反乱鎮圧後、イギリスによって父は処刑された。アーザードは１８６４年に創立間もないガヴァメント・カレッジ・ラーホールの教壇に立ち、その後オリエンタル・カレッジ(現パンジャーブ大学)でも教鞭を執った。ガヴァメント・カレッジにいた G. W. Leitner の誘いで一八六六年に設立された「パンジャーブ協会 Anjuman-e Panjāb」の会員としてウルドゥー近代詩の確立に貢献した。ウルドゥー語詩人伝『生命の水 *Āb-e Ḥayāt*』や『アクバル宮廷 *Darbār-e Akbarī*』アーザードの著作に関する研究には[松村一九八九、一九九〇、一九九一、一九九二、二〇〇五、二〇〇九、二〇一二、二〇一三、二〇一四年] や [近藤 二〇〇九、二〇一〇、二〇一一、二〇一二年]、『生命の水』の校訂本には [Tabassum 1978] がある。

[6] Sir Thomas Walker Arnold (1864-1930)。イギリス出身の東洋学者。近代インド・ムスリムの啓蒙運動であるアリーガル運動を牽引したサイイド・アフマド・ハーンとの知己により、一八八八年からアリーガルのムハマダン・アングロ・オリエンタル・カレッジ(アリーガル大学の前身)で教鞭を執ったのち、一八九八年にラーホールのガヴァメント・カレッジの哲学の教授に着任し、その後パンジャーブ大学東洋学部長を務めた。一九〇四年にイギリスに帰国し、インド文書館に就任後、在英インド人の教育やイギリスのインド統治にも関わり、一九二一年から三〇年まではロンドン大学でアラビア語とイスラーム学の教授となった。著書には *The Preaching of Islam: A History of the Propagation of the Muslim Faith*(1896)、*The Court Painters of the Grand Moghuls* (1921), The Caliphate(1924)、*Painting in Islam, A Study of the Palace of Pictorial Art in Muslim Culture*(1928)などがあり、英語版イスラーム百科事典の監修も務めた。イクバールのイギリス留学のきっかけを作り、イクバールのドイツ留学を勧めるなどの支援を行った。

[7] Saiyid Aḥmad Khān (1817-98). インド・ムスリムの近代化の指導者。インド大反乱（一八五七年）以前はイギリス政府に仕えたが、大反乱直後に『インド大反乱の諸要因』(1858)を記し、イギリス政府とムスリムとの和解を訴えるとともに、ムスリムの近代化を推進した。アフマド・ハーンは四度パンジャーブを訪れたが、その際、イクバールの恩師ミール・ハサンとも面会していた。

[8] Sir 'Abd al-Qādir Qureshī, 1872-1950. パンジャーブのルディアーナ生まれ。ムスリム英字紙 *The Observer* の編集者を経て、一九〇一年にラーホールからウルドゥー語文芸誌『宝庫 *MaKhzan*』を発刊、イクバールはこの雑誌に論文や詩を発表した。一九〇四年に法律を学ぶために渡英し、一九〇七年に帰国後はイギリス統治下でのパンジャーブ政府の教育相などを歴任した。

[9] イクバールの一九〇五年のイギリス留学を指している。

[10] この地区に多くの伝統的な医療を施す医師（ハキーム）が居住していたことからこう名付けられたが、文人が数多く住まうことでも知られていた。この

ため、ロンドンの文人が集まるチェルスィー通り（Chelsea）に因んで、「ラーホールのチェルスィー」とも呼ばれる。ここに住んでいた文人たちの伝記に[Shujā' 1989]があり、この地区の博物館については[露口 一九九二年]がある。

[11] Shaikh Imām al-Dīn, (1819-1859). 父親に次いでスィク王国時代のカシュミールの支配者だった。

[12] 一八四九年にラーホールがパンジャーブ州都となって以来、ラーホールには多くの文人や出版人がデリーなどからやってきて、多くのウルドゥー語の新聞や雑誌の発刊が始まった。パンジャーブ協会後、ラーホールで文人がウルドゥー詩を発表するようになるが、デリーヤラクナウーなど、「ウルドゥーの本場」を自称する人々は自身を「言葉（できる）人々 **ahl-e zabān**」と呼び、パンジャーブの文人を「パンジャーブの人々 **ahl-e Panjāb**」と呼んで軽んじ、そのウルドゥー語の用法について批判を展開した。こうした批判に対し、ラーホールの文人はデリーのウルドゥー古典詩などを引用して論駁したが、地域差を引き合いにウルドゥー語話者が対立する構造は現在も見られる[山根 二〇〇四年]。